

# OMEPP について



山 下 俊 郎

O. M. E. P. というのは Organisation Mondiale pour l'Education Prescolaire というフランス語の四つの頭の文字をとった略称で、英語では、World Organisation for Early Childhood Education というのが公式名称である。世界幼児教育機構の訳語を用いているが、普通は O M E P の略称で通用している。

一九四六年三月、第二次世界大戦後の混乱がまだ残っているスカンヂナビアへ講演旅行をしたイギリスのアレン女史が、幼児教育に関心を持つ人々に会い、国際的な幼児教育機構を作る必要性のあることを訴えた。そしてスウェーデンのミルダル女史と協議し、七月にこのような意図を実現するために数か国からの有志がロンドンに集まった。さらに、十一月にユネスコ・ハウスで会議を開きこの組織実現のための計画を練り、次いで翌一九四七年五月にその準備委員会設立のための会議がコペンハーゲンで開か

れた。一九四八年五月パリで開かれた委員会において、同年八月ブラハで開かれるユネスコ主催の世界児童教育セミナーに引き続き、世界幼児教育会議の第一回を開くことが決定された。

この第一回会議には十八か国が参加し、議長にミルダル女史となり、やがて O M E P の初代総裁に選ばれた。そして、十一の国に委員会が設立されたのである。

一九四九年八月、パリのユネスコ・ハウスでアレン女史を議長として第二回大会が開かれ、三十三か国が参加した。その後第三回以降の大会が、隔年に次の各地で、それぞれのテーマについて開かれている。

一九五〇年 ウィーン 幼児の基本的要求

一九五二年 メキシコ・シティ 就学前期の社会的役割

一九五四年 コペンハーゲン 幼児教育者の選抜と訓練

一九五六年 アテネ 生後一年間の重要性

一九五八年 ブラッセル 幼児の生活に対する地域社会の重要性

一九六〇年 ザグレブ 児童の生命としての遊び

一九六二年 ロンドン 幸福にして健康な次代の子どもたち

一九六四年 ストックホルム 急激に変革しつつある世界における児童

一九六六年 パリ 幼児と幼児教育における親の役割

一九六八年 ワシントン 児童の権利——その可能性の實現

そして、一九六八年の第十二回大会において、従来隔年の世界大会を今後は三年に一回開くこととし、第十三回大会はドイツのボンで「幼児の発達における遊びの教育的役割」のテーマで開かれることに決定している。なお、世界大会の次の年には各国において国内大会を開き、さらに次の年には世界五地域に分かれている地域大会を開き、その結果を翌年の世界大会に持ちよって会議することになっている。

OME Pと日本との関係は、一九六一年七月ジュネーブで開かれた国際公教育会議に出席した文部省の奥田真丈氏（当時初等教

育課長補佐）が、同会議に出席していたアメリカのガッパード女史からOME Pの話聞き、同年九月欧米教育視察に出席する日本私立幼稚園連合会の大河内四郎氏に伝え、同氏がアメリカ訪問の際、同女史に会って、一九六二年のロンドン大会への日本の参加のすすめを受けたことから始まっている。

そして、一九六二年のロンドン大会に、わが国からはじめて私幼のメンバー十名がオブザーバーとして参加した。翌年研究のため渡欧中の日名子太郎氏がストックホルムでスウェーデンのOME P委員会会長でOME P副総裁のスメッドベルヒ女史に会い、日本の加盟について話し合い、第十回のストックホルム大会への参加を約束した。一九六四年のストックホルム大会には、日私幼その他の人々が二十九名参加し、未加盟国から参加している国々の状況報告の時間に、日名子氏が日本の状況を報告、スカール総裁はじめ、OME P首脳部から、日本の正式加盟を要請され、日名子太郎、多田鉄雄、池田節夫の三氏が日本でのOME P連絡員となった。そして、一九六五年四月たまたま来日したスメッドベルヒ女史との懇談を機に、OME P正式加盟の話が進められて、一九六六年一月に日本の国内準備委員会が、わたくしを委員長として発足する運びとなった。

そして、六月に準備委員会の規約を決定し、同年のバリの世界大会に正式加盟を申入れた。この規約は国情の違いから来る条件

のため一部修正などがあって、しばらく手間どつたが、一九六八年の一月のOMEPP本部の理事会において承認された。なお、六年のバリ大会には日本から多くの参加者があり、小川正通氏が日本の状況の報告を行なった。

このような状況に続いてワシントンで開かれた一九六八年の第十二回大会には、日本は準備委員会としてではあるが、はじめて正式参加を認められ、理事会へも代表として委員長のわたくしと多田鉄雄、日名子太郎の合計三名が出席し、開会式にもわたくしが代表としてはじめて壇上に整列した。そして、一九六九年八月九日にバリで開かれた本部理事会において、わが国の国内委員会が正式の日本委員会 National Committee として承認されたのである。

準備委員会を経て正式の国内委員会となった日本の委員会は、当初から幼児保育関係の国内八団体からの代表者で組織され、八団体の合同運営の形をとっている。その八団体とは、日本保育学会、日本私立幼稚園連合会、全国国立幼稚園長会、全国国立大学付属学校連盟幼稚園部会、日本私立短期大学協会保育科研究委員会、全国社会福祉協議会保育協議会、全国保母養成協議会、全国私立保育園連盟の各団体であり、幼稚園、保育所関係のすべての団体が、国際的つながりにおいて一つにまとまっているユニークな団体が、このOMEPP国内委員会なのである。OMEPPを構

成しているのは、各国委員会三十一、準備委員会五、準会員三という数字になっているので、わが国は右の三十一のうちの一か国であることになる。

現在のOMEPPの総裁は一九六八年ワシントン大会で選ばれたフランス、カーン大学のミヤラレー教授である。この総裁のもとに世界を五つの地域にわけてその地域毎に副総裁がある。五つの地域というのは、北部ヨーロッパ、南部ヨーロッパ、南北アメリカ、中近東及びアフリカ、極東オーストラリア太平洋地域の各地域であり、わが国は極東オーストラリア太平洋地域に属しており、この地域の副総裁はフィリップスのソリス女史である。

OMEPPの基本精神は、幼児教育における国際的理解と国際的協力を高めることである。一九六八年のワシントン大会で当時の総裁ノルウェーのスカール女史が開会の辞に述べた内容にそのことが盛られているのであるが、(保育の手帖三月号参照)大会に参集している多数の国々の間には、同一性と差異性がある。この同一性と差異性の認識の上には、かつては思いもつかなかったような同時的経験を体験しつつ、国際理解と国際協力によって、幼児の幸せを確保し促進し、人類の生活を高め幸せにし、世界平和に貢献することが提唱されている。このことはすでに、OMEPPの規約の第二条にその目的として、「全ての国々の幼児の生活学習と教育を振興し、幸福な幼年期と家庭生活をはぐくみ、それにより

世界平和に貢献する」ことが掲げられているのであるが、これをさらに具体的に促進する方途を示しているということができるのである。わが国の幼児保育はその実際のレベルおよびまたその研究的レベルにおいて、世界にくらべてけっしてひけをとるものではないが、国際理解および国際協力という点においては、いままで十分であったとはいえないであろう。それについては、外国語があまり得意でないというわたくしたちのハンディキャップが大きいのであるが、これを乗り越えて、世界的視野を持ち、後日の世界人となるように、今日の幼児の保育が進められなければならないと思うものである。

以上のようなOME Pの状況、またわが国とOME Pとの関連というのが現状なのであるが、すでに述べたような規約によってわたくしたちは、第一回のOME Pの国内会議を一九六九年十一月十五、十六の両日、玉川大学を会場として開いた。世界大会の翌年それぞれの国で国内会議を開くという申し合せにしたがったのである。主題は、一九七一年の世界大会に至るまで一貫している「幼児の発達における遊びの教育的役割について」 The Educational Role of Play in the Development of Young Children である。この会議の様子は保育関係誌上に紹介されていると思うが、第一日は、経過報告、あいさつの後に、わたくしが「OME

Pと幼児教育」という記念講演を行なった。第二日は、午前中「遊びの教育的役割について」のテーマでシンポジウムを行なった。このシンポジウムでは、伝承文化の立場から加古里子、教育学の立場から上野辰美、心理学の立場から津守真、医学の立場から平井信義（都合により代読）、幼稚園の立場から鹿野京子、保育所の立場から加藤照子の諸氏が、堀内康人氏司会のもとに、興味ある見解を活発に展開し、フロアからの発言も活発で、時間不足の感さえあった。午後は参会者が三分科会にわかれ、シンポジウムのテーマにそって、岡田正章、西本脩、青木きみの三氏の司会のもとに討論が行なわれ、四時に散会した。この日の参会者は学生会員まで入れて二百余人であったが、熱心な参会者は北は北海道から南は九州から参会し、内容的にも質の高い会議で、第一回OME P国内会議の名にふさわしいものであった。なお、二日目の冒頭に会場校玉川大学の小原国芳学長のあいさつがあった。

このように、国際的つながりを持つOME P第一回国内会議が玉川大学の好意により成功裡に開かれたのであるが、今年一九七〇年には、十一月中旬を期して極東オーストラリア太平洋地域の地域大会が、東京で、国内委員会の主催のもとに開かれることになっている。初の国際会議としてわたくしたちはその成功を期している次第である。